

一般に、思考のプロセスは(1)に進むと考えられる。問題解決であれば、時間をかけた分だけ、解への到達は徐々に接近する。発見であれば、データが蓄積した分だけ、発見の可能性は少しずつ高まる。しかし、そのような(1)ではない、(2)なプロセスを通して、突然解が思いついたり、発見に至ったりする場合がある。しかも、後からなぜ解が発見されたのかの説明を求められても、その理由を報告することができない場合が多い。そのような、いわゆるひらめきを伴った思考を、洞察、もしくは洞察的思考と呼ぶ。このような洞察問題解決は、(3)に深く関与するプロセスであると言われている。

洞察には、一般の問題解決とは異なる際立った特徴がある。(A)

洞察研究の発展は、このような特徴的な思考の様式を、伝統的に確立されてきた問題解決の理論に基づいて説明する努力であったといってもよい。現在では、洞察は、そこに特有のプロセスがあるわけではなく、人間の一般的な認知特性が、問題の特質との関わりの中で、洞察という現象を引き起こしていることが明らかになりつつある。

(5)において誤った方法への固執を生み出すものを、(4)と呼ぶ。初期の洞察研究において頻繁に取り上げられた9点問題がある。一見非常に単純な問題であるにもかかわらず、多くの人が、この問題の解を見つけることができない。(B)

これらの(4)は、誤った問題空間の盲目的探索、もしくは誤った問題表象への固執などを生み出し、これが(5)の原因になる場合もある。その結果、これらの制約の存在により、解の存在しない問題空間の探索に陥ったり、たとえ解が存在しても、膨大な経路を探索しなければならないような不合理な問題空間の探索に陥ったりする。Kaplan and Simonは問題空間の概念を拡張し、洞察問題解決においては、(6)が必要であることを議論した。

ここまで述べてきた心的制約や誤った問題空間の探索（問題表象の構築）は、洞察問題解決の障害となる負の要因である。これまでの洞察問題解決研究では、圧倒的にこれらに代表される負の要因の同定に関わるものが多かった。一方で、洞察を促進する正の要因に関する検討は、比較的少ない。その中であつても、重要な問題解決の促進要因として取り上げられているのが、(7)の利用である。

問1 (1)から(7)の中に適当な文字を入れよ

問2 (A)について、200字程度で延べよ。(解答の文字数を明記せよ。)

問3 (B)について、その原因を200字程度で延べよ。(解答の文字数を明記せよ。)